

# 中国・日本における仏塔と経典埋納遺跡調査記

劉 海 宇<sup>※</sup>

参加者 菅野成寛（中尊寺釈尊院・岩手大学平泉文化研究センター）  
劉 海宇（岩手大学平泉文化研究センター）

調査一 中国山東省・実施日 2019年6月28日～7月3日  
調査二 日本関西地区・実施日 2019年9月18日～9月22日

## はじめに

経塚信仰とは、僧侶の指導下、写経した経典ほかを山腹や丘陵上の勝地等に埋納して供養する一連の信仰的営為を指す。日本では、12世紀を中心として仏典を埋納する経塚の造営が、九州地域から北海道にまで広範に波及した列島の現象であることが近年新たに判明してきた。日本の経塚の供養品と中国の仏舎利塔の納入品とが一致することから、列島の経塚の起源を大陸に求める研究潮流が兆しつつある。

日中韓三か国の仏塔に仏典を埋納するという東アジアで広く見られる営為と、日本の経塚信仰が形成する仏教的空間表象を解明すべく、2019年度における岩手大学と中尊寺釈尊院との共同研究、「東アジアにおける仏塔信仰と経典埋納研究」を実施した。その一環として、中国の山東省及び日本の関西地区において仏塔と経典埋納遺跡調査を行ったので、調査状況を報告する。

## 一 中国山東省における仏塔と経典埋納遺跡調査

2019年6月28日（金）

09:15 成田空港発、大韓航空 KE706 便で出発、ソウル空港で KE841 便に乗り換え、13:45、青島空港到着。レンタカーで山東省の省都済南へ移動、20:00 ホテルに到着。

2019年6月29日（土）

09:00、ホテル出発、歴城区博物館に向かう。この博物館には、隋代大業七年（611）建造の四門塔から出土した仏舎利等が保存されている。1972年12月、四門塔の補修工事の際に、心柱の地面

---

※ 岩手大学平泉文化研究センター

より高さ 1.6m のところに舍利石函が発見され（図 3）、その中に舍利瓶及び水晶等が入る銅函が安置され、銅函の外には薬草・香料等の供養物があった。<sup>1)</sup> 見学後、済南市南郊外にある柳埠鎮神通寺へ向かう。

11:00、神通寺に到着。四門塔を見学。四門塔は、中国現存最古の石塔で、平面が正方形を呈し、高さ 15.04m、辺長 7.4m、その四面ずつ高さ 2.1m、幅 1.4m のアーチ門が配置されている（図 1）。四面の門の中に、それぞれ仏像が安置されている（図 2）。相輪は、宝篋印塔をかたどっているようだ（図 1）。見学後、柳埠鎮のレストランで昼食を取ったのち、山東博物館へ向かう。

15:00、山東博物館で、郭思克館長を表敬訪問。その後、郭映雪氏に案内していただき、仏教造像美術展示室を中心に見学した。2019 年 3 月 27 日、東京の中国文化センターにおいて開催された山東省博物館協会の説明会で、調査参加者の菅野と劉は、郭館長に今回の調査のご助言を仰いだためである。

2019 年 6 月 30 日（日）

午前、山東省文物考古研究院の劉延常先生を表敬訪問。その後、曲阜に向かう。

15:30 曲阜到着。山東省文物考古研究院魯国故城発掘現場に行き、発掘担当者の韓輝氏の案内で発掘現場及び出土遺物等を見学した。

2019 年 7 月 1 日（月）

この日の調査は、曲阜師範大学の陳東教授も加わった。午前、金郷県へ向かう。13:30、金郷県政府文旅局へ行き、蔡運華課長に会って光善寺の状況について話を聞いた。その後、氏に案内していただき、光善寺塔出土遺物の保管先へ行った。2010 年 5 月、光善寺補修の際に、2 階半辺りの壁龕から、舍利 1080 顆が納入された銀舍利棺を含む銀器 22 点（セット）が発見された。その中に、「大唐貞観」銘をもつ九頁の銀板大般若経があり、銀糸によって綴じられている（図 4）。銀板は、長さ 16.96 cm 幅 14.26 cm、表題文字と見返し絵等が鍍金されている。<sup>2)</sup> 残念なのは、銀板経の内容が未だ調査されていないことである。正式報告書が未発表のため、保管室では撮影禁止だった。出土遺物の見学後、光善寺塔を案内してもらった。

八角九層、高さ 49m の光善寺塔は、地方志の記載では、貞観 4 年（630）に建造されたという（図 5、図 6）。塔の三階の仏像刻銘に「大唐開元歲次丙申丁未朔寅建造」とあり、その仏像が開元四年（716）四月八日の灌仏会に造られたことが分かる。塔の二階に登り、遺物が発見された壁龕の位置を確認しようと思ったが、行くには二階の軒上に出て外から回るしかなく、高所恐怖症のため、諦めざるを得なかった（菅野のみ見学）。見学終了後、蔡氏は高速道路入り口近くまで見送ってくださった。18:15、曲阜のホテルに到着。

2019 年 7 月 2 日（火）

午前、孔子廟・孔府・孔林を車窓から見てから、一路青島へ。16:00 青島のホテルに到着。

2019 年 7 月 3 日（水）

青島博物館へ向かい、仏像等の調査を行う。研究部主任の史韶霞氏が案内してくださった。その後、青島空港へ。14:25 発の KE862 便で出発、ソウル空港で KE705 便に乗り換え、21:05 成田空港に到着。

1) 黄国康「四門塔の維修与研究」、『古建園林技術』1996 年第 2 期、53-56 頁；馬天成『神通寺研究』、山東大学修士學位論文、指導教師：李森教授、2012 年 4 月、28-30 頁。

2) 王佳・李英渠・金舒声「光善寺與山東金郷仏教」、『法音』2015 年第 4 期、49-59 頁。

## 二 日本関西地区における法舍利埋納遺跡調査

2019年9月18日（水）

07:27、盛岡発新幹線で東京経由、12:47 京都駅に到着。レンタカーで薬師寺に向う。

14:00、薬師寺に到着。薬師寺は、天武天皇九年（680）に皇后の病氣平癒のため藤原京に建てられた寺院で、その後の養老二年（718）に平城京に移されたという。薬師寺の建物配置は、金堂を中心に、その手前に東塔と西塔、その背後に講堂となっている（図7）。西塔は享禄元年（1528）の兵火により焼失し、昭和五十六年に再建されたもの。東塔は幾度かの解体修理を経たものの、創建時の姿を伝える貴重な建築遺構である。東塔水煙の檼銘は、『広弘明集』巻28に掲載された、唐代長安西明寺の鐘銘を模して作成されたものだが、創建時代の文字史料として、建造の目的・建造者を特定するには最も重要なものである（図8）。金堂・東塔等を見学し、図録『国宝薬師寺展』と『東塔水煙降臨展』を購入した。

15:00、唐招提寺に到着。金堂・宝蔵等を見学しながら境内を回った（図9）。『唐招提寺—美術史研究のあゆみ—』<sup>3)</sup>を購入した。その中で、気になったのは第九章「唐招提寺の舍利信仰」で検討された金亀舍利塔である。その形は、金銅の亀の甲羅に十二弁八段の蓮華座が設けられ、蓮華座の上に透かし彫り円筒形の塔身をもつ宝塔が安置されて、宝塔の屋根には宝珠付きの相輪が掲げられている（図10）。その制作年代については、何度かの修理を経て塔身と亀座の年代が違おうようだが、第一世代の金亀舍利塔は平安時代とされている。1982年、中国江蘇省鎮江丹徒県から、唐代の銀鍍金亀座をもつ筒形容器「『論語玉燭』酒令筒」が出土した（図11）<sup>4)</sup>。鎮江は、鑑真が住職となった揚州大明寺と距離的に極めて近い。この「『論語玉燭』酒令筒」は、唐招提寺の第一世代の金亀舍利塔を考える際、重要な価値があろう。

17:30、奈良市内のホテルに到着

2019年9月19日（木）

09:00、ホテルを出て、道長埋経の出土地である大峰山寺に向かう。11:00 大峰大橋に到着。登山地図を見ると、山上ヶ岳にある大峰山寺に行くには二つの登山道があり、車道がレンゲ辻まで続く道を選んだ。車をとめ、徒歩で溪谷に沿う森林の山道を1時間ほど登っても到着する気配がない（図12）。鈴を鳴らしながら下山する参拝者に尋ねると、山上ヶ岳までさらに2~3時間かかるだろうと教えてくれた。登山の準備が不足のため、大峰山寺の調査を諦めるしかなかった。今度は登山物資を携え、往復6時間歩くことの身体的な準備をしたうえで再度挑戦したい。

14:45、金峯山寺蔵王堂に到着。仁王門・金堂等を見学し（図13）、『金峯山寺』（仏教新発見06）を購入した。この冊子の中には、山中を駆け回る大峰奥駈修行の日程等が詳しく紹介されている。その後、吉野宮の遺跡である宮滝遺跡に寄ったが、吉野歴史資料館が閉館のため、遺跡の南端に立つ「宮滝遺跡」の看板と近くの地形のみを見た（図14）。

15:10、談山神社に到着。西暦645年、藤花の満開の頃、藤原鎌足が中大兄皇子に蘇我入鹿討伐の謀略を進言したという「大化改新談合の地」が社号の起こりであるという。十三重塔は、鎌足の長男定恵和尚が唐より帰朝後、亡父追善のために唐の清涼山宝池院の塔を模して建立したが、現存の塔は享禄五年（1532）の再建である（図15）。

3) 大橋一章・片岡直樹編著『唐招提寺—美術史研究のあゆみ—』、里文出版、平成28年。

4) 丹徒県文教局・鎮江博物館「江蘇丹徒丁卯橋出土唐代銀器窖藏」、「文物」1982年11期、15-27頁。

18:00、ホテルに戻り、奈良文化財研究所の内田和伸氏も加わって一緒に夕食を取った。

2019年9月20日（金）

09:30、ホテルを出て、法隆寺へ向かう。10:15 法隆寺に到着。まず西院伽藍の五重塔と金堂を見学し（図16）、次に大宝蔵殿の陳列を見て東院伽藍へ移動し、夢殿と近くにある中宮寺を見た。西院金堂の釈迦三尊像と薬師如来坐像の光背の裏面にそれぞれ刻銘が施され、造像の目的と発願者名等があり、飛鳥時代の仏教研究には重要な文字資料である。図録『法隆寺』（小学館、2006年）を購入した。

14:30、奈良に向かい、春日大社と東大寺を見学した。東大寺の二月堂・三月堂は初めての見学で、三月堂（法華堂）の不空罽索観音像は古くて迫力があり、印象深かった。大仏殿参道の脇にある宝物館にも寄り、図録『はじめての東大寺』（別冊宝島2607）を購入した。

18:00、京都のホテルにチェックイン。

2019年9月21日（土）

10:00、ホテルを出て、善峯寺へ向かう。11:00、善峯寺に到着（図17）。住職の掃部光昭氏が迎えてくれた。境内を散策して資料館を見た後、応接間に案内されてお茶を飲みながら話をした。

13:40、長岡京遺跡に到着。長岡京遺跡（図18）及び向日市文化資料館を見学し、資料館には長岡京遺跡の出土遺物等が陳列されていた。蘇民将来の符として最古の「蘇民将来之子孫者」札を見たかったが、展示物になかったことは残念だった。図録『再現・長岡京』を購入した。

14:45、滋賀県石山寺に向かう。年代が判明するものでは最古の、1194年建造の多宝塔を見学した（図19）。ここには、六朝から唐代の漢籍写本として、『玉篇』巻第二十七・『漢書』高帝紀下と列伝第四残巻・『史記』巻第九十六と九十七残巻・『春秋経伝集解』巻第二十六と二十九残巻等が保管されており、貴重な漢籍資料群である。これらの写本資料は、すでに凡そ百年前京都に亡命した羅振玉によって公刊された。<sup>5)</sup>

18:00、ホテルに戻る。

2019年9月22日（日）

10:00、ホテルチェックアウトして、京都駅へ向かう。11:08 発新幹線で盛岡に帰る。

## おわりに

本共同研究の目的は、日中韓三か国における仏塔と經典埋納の史料調査により、日本の経塚信仰を取り巻く東アジアの思想史・文化史的な動静を解明し、新たな経塚成立史を樹立することにある。本年度は、中国山東省と日本関西における関連寺院や遺跡を調査した。山東省の調査では、金郷県光善寺から出土した「大唐貞観」銘の銀板大般涅槃經等を中心に、済南市では隋代「大業七年（611）」銘をもつ四門塔とそこから出土した舍利函等を調査した。関西地区では、薬師寺・唐招提寺・法隆寺・石山寺を中心に、仏塔及び舍利容器等を調査した。とくに唐招提寺の金亀舍利塔は、中国鎮江から出土した唐代の銀鍍金酒令筒の意匠と一致するのは一目瞭然である。今回は、これらの調査を通して、日中両国の仏塔と經典埋納に理解を深めたことができ、たいへん有意義なものであった。

5) 李蜜「羅振玉日本訪書及刊行述略」、『文献』2016年3月

第2期、179-191頁。





图1 四門塔



图2 西方の阿弥陀仏



图3 四門塔出土の舍利函



图4 光善寺出土の『大般涅槃經』銀板經



图5 金郷県光善寺塔

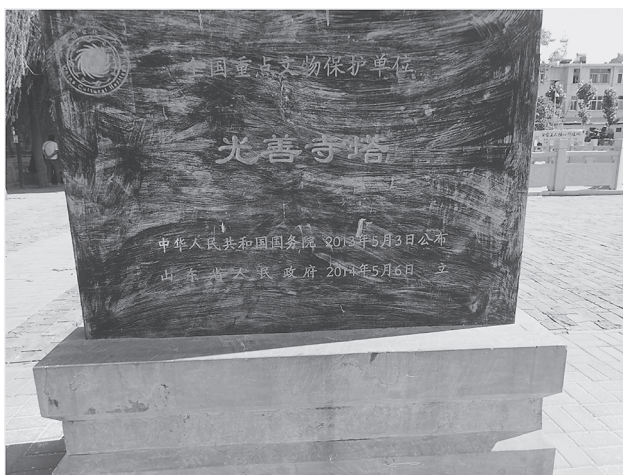


图6 光善寺塔保護碑





図7 薬師寺の西塔と金堂

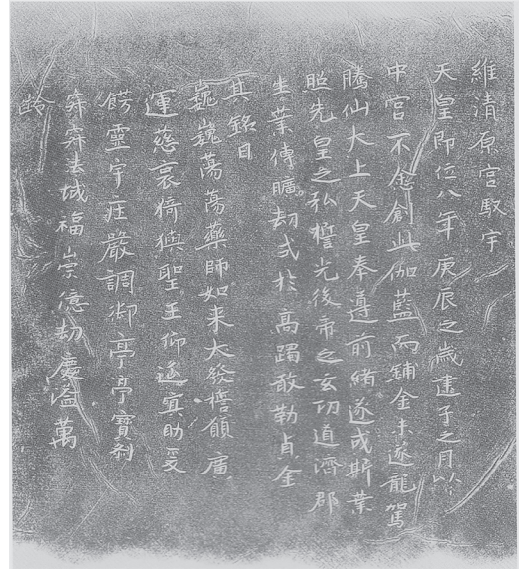


図8 薬師寺東塔水煙檣銘の拓本



図9 唐招提寺の金堂



図10 金亀舍利塔



図11 銀鍍金酒令筒



図12 大峰山の森林溪谷



図13 金峯山寺蔵王堂の金堂





図 14 宮滝遺跡とその周辺の地形



図 15 談山神社の境内と十三重塔



図 16 法隆寺西院金堂と五重塔



図 17 善峯寺



図 18 長岡京遺跡



図 19 石山寺多宝塔